

太陽は誰のために昇る

池田真也

ユージ：格好つけようとするが様にならない。何かが欠落しているために社会に溶け込めない。そんなことがコンプレックスになっているチンピラ。

アヤノ：退屈な少女

フジイ：ユージの幼なじみで親友。病気の妹を抱えている

#1 「勝手にしやがれ」のラスト。「俺は最低だ」

撃たれるユージ。「俺は最低だ。」

倒れているユージを横で見ている娘。

女A 「なに勘違いしてんのよ。馬鹿じゃないの。」

車がやってくる。乗り込む娘。去っていく車。

ユージは起き上がり車を追いかける。必死になって走るが息がきれる。コンクリートの上にたおれこむユージ。ぎらぎら輝く太陽。

#2 組事務所

ユージはぺいぺいのチンピラ。使いつ走りの存在。年下の組員にも抜かれなかなか偉くなれない。今日もどなられる。

組長はライバルの川島組に押されている。だらしが無いぞと話している。

#3 高速道路の下の空き地

空き缶を狙ってピストルを撃っているユージ。なかなかあたらぬ。そこへトラックがやってくる。幼なじみでかつて働いていた運送会社の同僚のフジイ。ユージに近寄ってくる。

ユージ「何だよ。」

フジイ「ここに来たら会えると思ってた。」

ユージ「なんかようか。」

フジイ「：戻って来いよ。社長には俺からも謝ってやるから。」

ユージ「カタギなんて。おれには無理だよ。」

フジイ「いつまでこんなことやってるつもりだ。もう一回頑張ってみろよ。もうチンピラなんていやだって言ってたじゃねえか。(ユージからピストルを取り上げる。引き金をひいたらたまはカンにあたった。)できねえわけねえんだよ。」

フジイから再びピストルを取り上げる。

ユージ「俺は殺し屋になるんだ。」

フジイ「お前はアホか。何が殺し屋だ。くだらねえ。：虫一匹ころせねえ弱虫のくせに。」

ユージ「：なんだとコノヤロウ。もういっぺん言ってみろ。」

フジイ「弱虫って言ったんだ。聞きたかったら何度でも言ってみろ。せ。」

ユージ「俺は弱虫なんかじゃねえ。」

(銃をフジイのほうにむける。)

フジイ「なんだよ。てめえ：撃てるもんなら撃ってみろよ。」

フジイ、ユージの方にゆっくり歩いてくる。

フジイ「ガキの頃から、てめえがいじめられるのをいつも俺が助けたよな。女や就職だつて俺の紹介だったしよう。…そのたびに失敗しやがって。」

ユージ「だまれ。俺は弱虫なんかじゃねえ。」

フジイ「てめえはひとりじゃ何もできねえんだよ。インポ野郎。(社会的に不能だということと、ユージがインポテンツだということにかけている)」

ユージ「…畜生。」

引き金にかけられた指。でも引けない。

その瞬間フジイの右手がユージのピストルを振り落とす

ユージを殴る。血をだして倒れるユージ。

フジイ「いつまでも甘えてんじゃねえよ。馬鹿野郎！」

トラックに乗って去っていくフジイ。

#4 港

一人海を眺めるユージ。ひとりたたずむ少女を見つける。

彼女に近寄って行く。

ユージ「…死のうと思ってんじゃねえだろうな。」

振り返る少女アヤノ

アヤノ「…まさか。」

ユージ 「じゃあ、何してんだよ。」

アヤノ 「青を探してるの。」

ユージ 「なんだ、そりゃ？」

アヤノ 「あんた、海の青さと空の青さとどう違うか分かる？」

ユージ、海と空を見つめるがわからない。

ユージ 「どう違うんだよ。」

アヤノ 「：：まだ、わからない。でも違うことは確かよ。どちらも私の青じゃない。」

ユージ 「わかんねえな。」

アヤノ 「あんた何者？」

ユージ 「何者に見える。」

アヤノ 「さあ。：：」

ユージ 「俺は殺し屋だ。」

笑い出すアヤノ。

ユージ 「何だよ。」

アヤノ 「こんな優しい殺し屋、見たことがない。」

ユージ 「優しいってどうしてわかる。」

アヤノ 「綺麗な目をしてる。私の青に近いかもしれない。」

ユージ 「：：なんだそりゃ。」

アヤノ 「殺し屋ってピストル持ってるの？」

ユージ「ああ。あるよ。」

アヤノ「誰かを撃つたことある？」

ユージ「これから撃つんだ。川島っていう悪いヤクザがいる。そいつを撃ち殺す。」

アヤノ「私もピストルが欲しい。」

ユージ「ピストルで何を撃つんだよ。」

アヤノ「さあ、わからない。……ただムカツクんだ。むしように腹が立つ。」

アヤノを見つめるユージ。

#楽しそうに話をするユージとアヤノ

#別れ際

アヤノ「あなたって面白いひとね。」

ユージ「また会えるか？」

アヤノ「いいよ。夕焼けの綺麗な日はここにいるから。」

ユージ「まだ名前聞いてなかったな。」

アヤノ「そういうものは男から名乗るもんよ。」

ユージ「俺はユージっていうんだ。ゆうは勇気のゆう。」

アヤノ「私はアヤノ。この名前、好きじゃない。古臭くて。」

ユージ 「いい名前じゃねえか。」

アヤノ 「…本当？」

ユージ 「本当さ。」

#5

川島暗殺

#6

組事務所得意げのユージ。

組員A 「川島が暗殺されました。」

組長 「何だと！うちの衆か。」

組員A 「違うと思います。でも川島の連中はうちの仕業だと思っ
ます。」

組員B 「戦争ですか。」

組長 「絶対にそれだけは避ける。今はその時期じゃねえ。」

組員B 「困ったことになりましたね。」

組長 「どこのどいつだ。ぶっ殺してやる。」

隅のほうで小さくなっているユージ

#7 夕陽の見える場所

ユージはひとりで夕陽を見ている。

アヤノがやって来る。

アヤノ「……なにしてんのよ。しけたツラしてさ。」

ユージ「……アヤノか……ふたりで逃げねえか。」

アヤノ「……逃げる。」

ユージ「誰も俺たちのことを知らない街に行こうぜ。見たこともないような場所で一緒に暮らそうよ。」

アヤノ「どこへ。」

ユージ「最初に来た電車に乗って終点まで行こう。何度も乗り換えて、線路がなくなるまで行ったら、そこに住もう。」

アヤノ「映画みたいだね。」

ユージ「そうだな。映画みたいに生きたいって思ってたんだ。……な、いいだろ。」

アヤノ「……いいよ。」

ユージ、アヤノを抱き締める。

ユージ「……お前、変な奴だな。よく知らない男と。」

アヤノ「……なんか面白そうじゃん。……つまなくなかったら、なんでもいいのよ。」

ユージ「……俺さあ、めちゃくちゃなことしてんだけど、全然怖くないんだよ。……絶対、離さないからな。」

#8 酒場

フジイと二人で飲んでいる。

ユージ「女ができたんだ。」

フジイ「(笑う)いい女か。」

ユージ「それは愚問だぜ。」

フジイ「良かったじゃねえか。」

ユージ「いっぺん恋っていうもんをしてみたかったんだ。今度こそな…今度こそな。…よっしゃ…逃げるんだ。その女と」

フジイ「…どうしたんだよ一体。」

ユージ「実はさ、川島をやったの俺なんだ。」

フジイ「お前…」

ユージ「バレル前にずらかろうとおもってな。見たこともない土地に行く。それでなにもかもやり直すんだ。…これからは誰にも俺のことをバカだなんて言わせねえ。」

フジイ「誰もそんなこと言ってねえよ。…お前、とんでもないことしたな。」

ユージ「まあな。…」

フジイ「すぐに逃げろよ。」

ユージ「ああ。明日ここから出て行く。…行く前にどうしてもお前

に会いたくてな。」

フジイ「…これ持ってけ。」

一万円札をもっているだけ渡す。

ユージ「…妹はいいのかよ。…手術するんだろ。」

フジイ「いいんだよ。そんなことは！余計な心配すんなよ。餞別だ。」

ユージ「…悪い。いつか百倍にして返してやる。」

フジイ「いいよ。」

ユージ「本当だぜ。むこうで一旗あげてやる。嘘じゃないぜ。絶対やってやるからよう。」

フジイ「よく聞け。奴ら甘く見るんじゃないよ。居場所を誰にも言うな。俺にも知らせるんじゃないぞ。…わかったか。」

ユージ「…わかったよ。」

フジイ「じゃあ行けよ。」

ユージ「…じゃあ。元気だな。」

フジイ「逃げるんだぜ。…うまく逃げろよ。」

頷くユージ。去る。

ひとり残されたフジイ。苦悩の表情。

フジイ「…バカヤロー…」

重いバッグを抱え走るユージ。早くアヤノに会いたい。

うれしそうに全力疾走

ユージの前に止まった車。出てくる3人の川島組組員。先

頭は若頭新宅。

新宅 「よう、兄さん。……随分なことしてくれたそうだな。」

ユージ 「お前……俺じゃねえ。……俺じゃねえよ。」

新宅 「じゃあ何で逃げるんだ。」

ユージ 「……違うんだ。……俺じゃねえ。」

新宅 「やれ。」

2人がかりでユージをリンチ。

ユージは泣き叫ぶ。

ユージ 「助けてくれ。いやだ！」

新宅ピストルを構える。

ユージの足を撃つ。

ユージ 「いやだ。いやだ。」

ユージの手を撃つ。

ユージ 「いやだああああああ。」

這って逃げようとするユージ。血と涙と鼻水で顔はめ

ちやくちやになっている。

ピストルをかまえる新宅。

泣き叫ぶユージ。

引き金を引く新宅。

頭を打ち抜かれ倒れるユージ。

新宅 「出て来いよ。」

うなだれて、車の中から出て来たのはフジイ。新宅、フジイに金を渡す。うなだれたまま受け取るフジイ。

新宅 「残りは後から払う。妹の手術代ぐらいは面倒見てやるからな。」

フジイを置いて車は去っていく。

フジイはユージの死体に近寄る。

ユージの顔に触る。体は震えている。右手にはしっかりと握られた札幌の入った封筒。

終わり